

§ 1 寺田一族と東寺の確執

～鎌倉時代・南北朝時代の矢野～

①鎌倉時代（1185年～1333年）の政府

V T R

朝廷と幕府 二つの政権

A. 朝廷（京都の皇族・貴族）の政権

奈良・平安時代に引き続いて全国の行政を継続

B. 鎌倉幕府（源頼朝が開いた武士の政権）

1183年～1185年、東国の行政権、全国の治安維持権を

朝廷（皇族・貴族政権）から委託される

1192年、源頼朝が征夷大將軍に任命され全国の武士を統括

②皇族・貴族・寺社・鎌倉幕府將軍の経済基盤

荘園公領制…全国の土地が、ほぼ半々の割合で、荘園・公領に分かれる。

荘園…都の皇族・貴族・寺社・幕府將軍の領地

公領…^{こくが}国衙（＝各国の地方役所）の領地

矢野地域は？ 矢野荘と呼ばれた荘園

荘園のしくみは？

MEMO

③寺田一族（矢野荘 現地支配人）

2-2

◆ 立場と勢力範囲

A. 鎌倉幕府での地位

鎌倉幕府の御家人（=家来）

梶原景時が播磨の守護として治安維持、御家人武士の統率を

やっていた頃、御家人になる

代々、御家人として鎌倉幕府に奉仕。

モンゴル襲来（1274, 1284年）の前後に九州方面を警備

いこくけいごばんやく
※異国警固番役

B. 矢野荘地域では

秦氏の子孫を自称する武士（但し上野出身の説も）

くもん
矢野荘公文（現地支配人 武士など現地有力者から任命される

主に公文書を扱う）

おおさけ 若狭野土井大避神社別当・はふりし 神主・祝師職

C. 矢野荘以外の地域では

◆ 播磨国内では…

さこし
坂越荘（現 赤穂市内） 浦分一部の地頭職、木津村畠二町地頭職

あくま
※坂越荘地頭飽間氏 寺田家と姻戚関係を持つ。

守護赤松氏の海運を請け負う

※前回触れた山本氏系図に伝えられる伝承

やまもとぎょうぶきょうたかやす
山本刑部卿高安 秦河勝に従い、坂越に来る

雨に遭い、宿をとった場所が雨内

最初、高野に、後に木津に住む

木津大避神社を建立

ちぐさ たかせぶね
※千種川高瀬舟水運業者の信仰

福井荘（現 姫路市西部） 東保 地頭職

きっかわ
※福井荘地頭吉川氏 福井荘に水軍の基地を設ける

◆播磨以外では…

2-3

備前国^{くにとみ}国富名地頭職（現 岡山市国富）

摂津国^{ずだし}頭陀寺地頭職（現 大阪府豊中市）

※摂津国^{くらはし}倉橋荘（棕橋荘） 大阪湾に注ぐ神崎川・猪名川の合流点
交通の要衝。

貴族・皇族が進出

④荘園領主（最終的に東寺）

V T R

矢野荘の初期の名称…^{ひさとみのほ}久富保

最初、藤原顕季の領地→皇族に嫁いだ孫が相続、皇族領に

1137年、皇族領荘園として政府の公認を受け、矢野荘に。

矢野荘成立当時の荘園の範囲（地図参照）

矢野・若狭野地域中心 那波・佐方地域は開発予定地として荘域に

※那波・佐方地域は12世紀後半（1100年代）に開発進展

1313年～1317年、皇族から東寺に寄進

東寺とは？

正式名称 ^{きょうおうごくじ} 教王護国寺

823年、嵯峨天皇が空海に与える

真言宗の拠点に

皇族から矢野荘を寄進された直後

寺田一族の公文職を更迭、寺田一族との争いに発展。

⑤最初の合戦

1318年前後 寺田一族が、矢野荘に乱入。

東寺が名主（有力農民）を味方に付け、寺田一族を撃退。

◆戦いに関わった農民の一族の証言 ～1379年実長（信阿の甥）の申状～

東寺が矢野荘を領有され始めて間もない頃、悪党寺田法念らが、矢野荘に乱入して、ここが滅びかけたとき、東寺の使者のこんれんいんどの金蓮院殿、べんどの弁殿が派遣されて、数度にわたって合戦をした。そのときに伯父の信阿は東寺の配下で戦い、無二の忠義をつくした。弁殿が負傷して、討たれかかったとき、信阿は彼をかばって重傷を負った。

どんな人々が参加したか？

地図

鎌倉時代末期 ごだいご 後醍醐天皇が倒幕を計画

赤松円心 のりむら（則村）（上郡町赤松村）

こけなわ 苔縄城（上郡町）で倒幕の挙兵

高田郷（上郡町）の高田兵庫助を討つ

摂津摩耶山（神戸市）、瀬川宿（大阪府箕面市）で幕府軍撃破

足利尊氏とともに ろくはらたんたい 六波羅探題（鎌倉幕府の京都の拠点）を襲撃

1333年 鎌倉幕府滅亡。代わって後醍醐天皇、建武政権樹立

参考

後、赤松円心は建武政権に反旗を翻した足利尊氏に味方。

1336年、赤松円心が白旗城、子の則祐が感状山城を拠点に、

建武政権方の新田義貞と戦う

※則祐は足利尊氏から感状を与えられる 感状山の名の由来

建武政権の土地政策

◆本領安堵法

開発領主の子孫、何代にもわたって、その土地を領有した者が
不当に領地を奪われた場合は、受け継いできた土地領有の
証拠文書をもとに裁決する

1333年 寺田法念ら矢野荘に乱入

東寺、農民を味方に付け、寺田一族を撃退

◆戦いに関わった農民の一族の証言

～1379年実長（信阿の甥、実円の子）の申状～続き

また、建武年間の初期に、重ねて法念一派が大勢の軍勢を率いて、この地に討ち入ったとき、東寺からは みなみばたどの 故南端殿、 あわのりっしごぼう 阿波律師御房が派遣された。城郭を大避殿山上に構えられ、度々合戦をしたが、亡父実円は東寺の味方として身命を捨てて、昼夜の合戦に参加した。それだけではなく、城内の食糧がなくなってしまったので、信阿・実円兄弟は種々の計略をめぐらし、奥山より食糧を運び入れ、南端殿・軍勢を助けた。…ついに悪党を追い落とし、現在にいたるまで、無事に東寺もこの地を領有なさっている。

§ 2 秦為辰開発伝承誕生

～ 寺田一族の公文職奪還、最後の試み ～

①寺田一族の公文職奪還、最後の試み

1335年頃、寺田範長が莊園領主に公文職再任を訴える

◆訴状の内容

公文職に再任してくれたならば、開発の由来、代々の領有を証明する文書を東寺に進呈する。そうすれば、東寺の支配が行き届いていない那波・佐方地域の支配も行き届いて、年貢はもっと増えるであろう。

②秦為辰の開発と領有

◆1075年、秦為辰が「^{ほけがみ}歩危上・^{ほけしも}歩危下」の領有を申請

※^{だいじょう}赤穂郡司・播磨国大掾を歴任

※歩危はどこか？

古文書の記載する範囲

東限 尾朝路（現 ^{おなし}尾名志 ^{くが}陸 山手町二丁目）

南限 童堂（現 岩屋堂、童堂の峰）
鷹取山・法師崎（現 高取山 法師崎）

北限 大蔵山（現 ^{こうみょうせん}光明山）

西限 長尾（現 若狭野町入野 小字 長尾）

歩危の地名の由来…切り立った崖

^{ふこさ}普光沢川・^{おこく}苧谷川近辺…ホケの地形がいくつか

^{ふこさ}普光沢川・鮎婦川合流点東側…ホケ谷山の地名

◆後醍醐天皇の本領安堵法（開発領主の子孫、何代にもわたって、その土地を領有した者が不当に領地を奪われた場合は、受け継いできた土地領有の証拠文書をもとに裁決する）。

この原則を適用して、公文職を奪還するために、

寺田範長を公文職に再任して、この原則を適用すれば、

東寺の那波・佐方地域の支配も強化できることを強調するために、

この伝説を創り上げた。

◆播磨国

秦氏の入植、千種川流域を開発

大避神社の分布も拡大

866年 赤穂郡司秦内麻呂、求福教寺を建立

◆山城

秦氏、大堰川に堰を造営、嵯峨野を開発

中国秦王朝の都城築造技術（ペルシアに起源）。

秦氏の土木技術を利用して、長岡京・平安京を造営

◆近江国

えち
愛知郡に秦氏が古墳時代に入植

新たな灌漑技術を利用、弥生期に全く開かれなかった愛知郡の開発

8世紀～10世紀、愛知郡の郡司（地方長官）を務める

MEMO